

6. PMD患者のN出納と蛋白 栄養状態 — その Follow up study

徳島大学医学部国立徳島療養所

新山喜昭 大中政治
坂本貞一 岡田和子
新居さつき* 山上文子*
坂口久美子* (* 国立徳島療養所)

PMD患者の栄養所要量を定めるため、患者の栄養調査ならびにN出納試験を行った。

昭和50年7月を第1回とし、以後51年1月、7月、52年1月、7月の計5回実験を行ったが、前3回の成績については51年度研究成果報告書にすでに述べた。重篤度のことなるPMD患者18名(A、B、C群それぞれ8.7.3名、昭和52年7月現在の平均年齢それぞれ13才、16才2ヶ月、22才)について3日間にわたり栄養調査を行い、N出納試験、基礎代謝量測定を行った。

対象患者は年齢の大きいほど重篤で、A、B両群はこの1年間僅かながら体重増加を示しているが、C群は減じており、またこの群の1人は死亡したため実験開始時(昭和50年)の4名から3名となった。

昭和52年7月の基礎代謝量及びエネルギー摂取量を表に示した。夏季のためエネルギー摂取量はやや減じており、約1000～1100 kcal/日であった。また体重1kg当りのエネルギー摂取量は同年令のその約80～90%であった。一方基礎代謝量は32 kcal/kg前後で、同年令のそれと比べるとA、B、C群でそれぞれ3%、14%及び34%大であった。

全5回の実験例についてみると、N出納(Y 、mg N/kg/日)と摂取N量(X 、mg/kg/日)の間には $Y = 0.39 X - 78.20$ ($n: 92, r = + 0.548, P < 0.001$)の関係があり、これからN平衡維持のための摂取N量は202 mg N/kg/日と計算された。

以上から患者のエネルギー所要量は亢進している基礎代謝量、発育、歩行装具着用による消費エネルギー増大を考慮して決定すべきことを示した。またN平衡維持のため、少くも1.3 g/kg以上の蛋白質摂取を行う必要のあることも示した。

Basal metabolic rate and energy intake of PMD patients

Groups	Body weight	Measured BMR		Standard BMR kcal/kg	%	Intake energy		Energy allowance %	
		kcal/day	kcal/kg			kcal/day	kcal/kg	kcal/kg	%
A	24.9	829±85	33.6±3.6	32.8	103	1098±192	44.3±6.6	54.5	82
B	28.5	890±96	31.7±4.4	27.8	114	1165±205	40.9±2.8	46.2	89
C	29.3	955±157	32.6±0.3	24.2	134	1001±227	33.9±2.4	40.3	84

7. PMD患者の栄養指導

弘前大学医学部

木村 恒

現在のところ、進行性筋ジストロフィー患者（以下PMDと略）の治療は主として対症療法がおこなわれているが、いかなる疾病においても、その治療は栄養が基調となると言っても過言ではないであろう。

本症の場合、残念ながら病因不明、治療法が確立していないけれども、患者の体力を出来るかぎり維持し、症状に応じた食餌を与え、延命効果を計ることが医療関係者の使命であると考え。それには患者に対して常に適切な栄養を含んだ治療食餌を作り、それを患者に食べさせ、栄養状態を良好に保たなければならない。前者は食餌基準を必要とし、後者を実践するには栄養指導に重点を置くことではじめて目的が達せられる。

PMD施設の患者の大半が Duchenne 型でしかも身体発育の大きい学童期に当り、症状変化も著しい点を考慮すると、患者の療育にとって健康を維持する栄養管理のための栄養指導が最優先されてしかるべきであろう。

このような視点からPMDの医療関係者や療育者に栄養指導の必要性を認識させると同時にその実践に多少とも役立つことを目的に「進行性筋ジストロフィー症の栄養指導の実際」と題する別刷を作り、各PMD施設及び関係者に配布した。その目次を掲げて内容の紹介とする。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

PMD 患者の栄養所要量を決めるため、患者の栄養調査ならびに N 出納試験を行った。

昭和 50 年 7 月を第 1 回とし、以後 51 年 1 月、7 月、52 年 1 月、7 月の計 5 回実験を行ったが、前 3 回の成績については 51 年度研究成果報告書にすでに述べた。重篤度のことなる PMD 患者 18 名(A、B、C 群それぞれ 8.7.3 名、昭和 52 年 7 月現在の平均年齢それぞれ 13 才、16 才 2 ヶ月、22 才)について 3 日間にわたり栄養調査を行い、N 出納試験、基礎代謝量測定を行った。

対象患者は年齢の大きいほど重篤で、A、B 両群はこの 1 年間僅かながら体重増加を示しているが、C 群は減じており、またこの群の 1 人は死亡したため実験開始時(昭和 50 年)の 4 名から 3 名となった。